

2

2010年度 学部 エコノメトリックス  
第13回講義メモ (訂正版)

2010年11月17日

## 3.7 多重共線性とその対策 (続)

## 前回スライド訂正

前回のスライド (pp.8-9) に不正確な記述があったので下記のように訂正する。

幾何的に見てゆくと、二つの説明変数ベクトル  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2$  の相関と内積の間には、 $\mathbf{x}_i^* = \mathbf{x}_i - \bar{x}_i \mathbf{1}$  ( $i = 1, 2$ ) とすると、

$$\text{Cor}(x_1, x_2) = \frac{\frac{1}{n}(\mathbf{x}_1^*)'(\mathbf{x}_2^*)}{\sqrt{\frac{1}{n}(\mathbf{x}_1^*)'(\mathbf{x}_1^*)} \sqrt{\frac{1}{n}(\mathbf{x}_2^*)'(\mathbf{x}_2^*)}} = \frac{\langle \mathbf{x}_1^*, \mathbf{x}_2^* \rangle}{\|\mathbf{x}_1^*\| \|\mathbf{x}_2^*\|} = \cos \theta$$

という関係があるので、 $\mathbf{x}_1^*$  と  $\mathbf{x}_2^*$  という二つのベクトルのなす角  $\theta$  が 0

4

3  
か  $\pi$  に近いことを意味する。このことから、この二つのベクトルを含む線形空間が不安定であることが分かる。

## 対策

数学的な対策としては、

- (a) リッジ回帰 (ridge regression)
- (b) 主成分回帰

があるが、経済分析の分野では余り用いられない。ただ、どちらの対策も対称行列の固有値 (eigenvalue) の性質を利用したものである。簡単に触れておくことにしよう。

まず、行列の固有値の定義を示そう。

## 定義 3.7.1 正方行列の固有値

いま  $\mathbf{A}$  を  $m \times m$  の行列とする。 $\mathbf{A}$  の固有値とは、 $m \times 1$  のベクトル  $\mathbf{w} \neq \mathbf{0}$  に対して、 $\mathbf{A}\mathbf{w} = \lambda\mathbf{w}$  を満たす  $\lambda$  のことをいう。またその  $\lambda$  に対応する  $\mathbf{w}$  を固有ベクトルという。通常  $\|\mathbf{w}\| = 1$  として定義する。

また、行列の固有値および固有ベクトルについては次の性質がある。

## 定理 3.7.2

正方行列  $\mathbf{A}$  の相異なる固有値  $\lambda_i, \lambda_j$  ( $i \neq j$ ) に対応する固有ベクトル  $\mathbf{w}_i, \mathbf{w}_j$  は直交する。すなわち、 $\mathbf{w}_i' \mathbf{w}_j = 0$  である。

6

5

## 定理 3.7.3

実正方行列  $\mathbf{A}$  が対称行列であれば、その固有値はすべて実数である。

定理 3.7.2 より、

$$\mathbf{w}_j' \mathbf{A} \mathbf{w}_i = \lambda_i \mathbf{w}_j' \mathbf{w}_i = \begin{cases} \lambda_i & \text{for } i = j \\ 0 & \text{otherwise} \end{cases}$$

が成立するので、次の定理が得られる。

## 定理 3.7.4

$\mathbf{\Lambda} = \text{diag}(\lambda_1, \dots, \lambda_m)$ 、 $\mathbf{W} = (\mathbf{w}_1, \dots, \mathbf{w}_m)$  とすると  $\mathbf{W}' \mathbf{A} \mathbf{W} = \mathbf{\Lambda}$  が得られるので、 $\mathbf{A} = \mathbf{W} \mathbf{\Lambda} \mathbf{W}'$  と分解できる。(固有値分解)

また、 $\mathbf{\Lambda}^{-1/2} = \text{diag}\left(\frac{1}{\sqrt{\lambda_1}}, \dots, \frac{1}{\sqrt{\lambda_m}}\right)$  とし、 $\mathbf{\Gamma} = \mathbf{W} \mathbf{\Lambda}^{-1/2}$  とすると、 $\mathbf{\Gamma}' \mathbf{A} \mathbf{\Gamma} = \mathbf{I}$  が成立する。

## (a) リッジ回帰

リッジ回帰は、正方行列の階数は非ゼロの固有値の個数に等しい、という性質に注目した手法である。定義 3.7.1 より、

$$\mathbf{A} \mathbf{w}_i = \lambda_i \mathbf{w}_i \quad (i = 1, \dots, m)$$

が成立するが、いま適当な  $\kappa > 0$  をとれば、

$$(\mathbf{A} + \kappa \mathbf{I}) \mathbf{w}_i = (\lambda_i + \kappa) \mathbf{w}_i$$

7

が成立する。したがって、 $A$  の固有値が  $\lambda_i = 0$  のときでも、 $A + \kappa I$  の固有値は正値  $\kappa$  になる。

リッジ回帰はこの関係を用いて、

$$\mathbf{b}^* = (\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}\mathbf{X}'\mathbf{y}$$

を  $\beta$  の推定量としたものである。ただ、このリッジ推定量は

$$\mathbf{b}^* = (\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}[\mathbf{X}'(\mathbf{X}\beta + \mathbf{u}) + \kappa\beta - \kappa\beta]$$

$$= \beta + (\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}(-\kappa\beta + \mathbf{X}'\mathbf{u})$$

になるので、

$$E(\mathbf{b}^* | \mathbf{X}) = \beta - \kappa(\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}\beta \neq \beta$$

となり、不偏推定量ではない。

8

また、平均 2 乗誤差は、

$$MSE(\mathbf{b}^* | \mathbf{X}) = \sigma^2(\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}\mathbf{X}'\mathbf{X}(\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1} + \kappa^2(\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}\beta\beta'(\mathbf{X}'\mathbf{X} + \kappa\mathbf{I})^{-1}$$

となる。

実際には、 $\kappa$  は平均 2 乗誤差を小さくするように選ぶ。しかし、経済分析では、不偏推定量でないためか、リッジ回帰はあまり用いられない。

**(b) 主成分回帰**

主成分回帰は、主成分分析を用いて説明変数  $\mathbf{X}$  を主成分変数  $\mathbf{V}$  に変換し、 $\mathbf{V}$  を新たな説明変数として回帰分析を行うものである。以下で概略を述べよう。

9

定数項付の重回帰モデルの推定結果は、

$$\mathbf{y} = \mathbf{X}\mathbf{b} + \hat{\epsilon} = \mathbf{1}b_1 + \mathbf{X}_2\mathbf{b}_2 + \hat{\epsilon} \quad (3.7.1)$$

で表される。ここで、

$$\mathbf{X}_2 = (\mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_k), \quad \beta_2 = \begin{pmatrix} \beta_2 \\ \vdots \\ \beta_k \end{pmatrix}$$

である。

いま、

$$\bar{\mathbf{y}} = \mathbf{y} - \mathbf{1}\bar{y}, \quad \bar{\mathbf{x}}_j = \mathbf{x}_j - \mathbf{1}\bar{x}_j \quad (j = 2, \dots, k), \quad \bar{\mathbf{X}}_2 = (\bar{\mathbf{x}}_2, \dots, \bar{\mathbf{x}}_k)$$

とすると、(3.7.1) 式は

$$\bar{\mathbf{y}} = \bar{\mathbf{X}}_2\mathbf{b}_2 + residual \quad (3.7.2)$$

10

と書きなおせる。定理 3.7.4 により、 $\bar{\mathbf{X}}_2'\bar{\mathbf{X}}_2$  を

$$\bar{\mathbf{X}}_2'\bar{\mathbf{X}}_2 = \mathbf{W}\Lambda\mathbf{W}'$$

に固有値分解できるから、 $(k-1) \times (k-1)$  の直交行列  $\mathbf{W}$  を用いて  $\bar{\mathbf{X}}_2$  を線形変換して、

$$\mathbf{V} = \bar{\mathbf{X}}_2\mathbf{W}$$

を得ることができる。 $n \times (k-1)$  行列  $\mathbf{V} = (\mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_k)$  を構成する列ベクトル  $\mathbf{v}_j$  ( $j = 2, \dots, k$ ) には、

$$\mathbf{v}_i'\mathbf{v}_j = \begin{cases} \lambda_j & \text{for } i = j \\ 0 & \text{for } i \neq j \end{cases}$$

という性質があるので、 $\frac{1}{n}\mathbf{V}'\mathbf{V} = \frac{1}{n}\Lambda$  が成立し、 $\mathbf{v}_j$  は (算術) 平均 0、分散  $\lambda_j/n$  の変数に変換されており、かつ  $\mathbf{v}_i$  と  $\mathbf{v}_j$  は互いに直交している。

11

$\Lambda = \text{diag}(\lambda_2, \dots, \lambda_k)$  を  $\lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_k$  のようにとるとき、 $\mathbf{v}_j$  ( $j = 2, \dots, k$ ) を第  $(j-1)$  主成分と呼ぶ。

$\bar{\mathbf{y}}$  を主成分  $\mathbf{V}$  について回帰したモデルを主成分回帰モデルとよぶ。その係数推定量を  $\mathbf{c}_2$  で表すと、

$$\bar{\mathbf{y}} = \mathbf{V}\mathbf{c}_2 + residual$$

となるが、 $\mathbf{V}\mathbf{c}_2 = \mathbf{X}\mathbf{W}\mathbf{c}_2$  であるので、

$$\mathbf{b}_2 = \mathbf{W}\mathbf{c}_2$$

として求めることができる。